

法然『無量寿経釈』における『往生要集』解釈の二面性

下 端 啓 介

はじめに

浄土宗宗祖法然（一一三三—一二二二、以下、全ての尊称略）は源信（九四二—一〇一七）の『往生要集』を契機として浄土門に入ったとされ、その説には『往生要集』が多く引用される。福原隆善氏は法然の法語における源信の名称や『往生要集』をはじめとする源信の著作の名称を調査し、その総数五八の用例を、「自己の主張を論証するもの」五一例、「主張の相違を示すもの」五例、「源信を批判するもの」二例に分類し、次のように評価する。

このようにみてくると、自己の主張を論証するものが圧倒的に多いことがわかる。念仏や名号の功德性を述べるところに特に多用される。しかし法然は源信を手ばなしで善導と同じようには位置づけていないことが知られる。明確に主張のちがいを示すものもあり、またその立場からかえって源信を批判するものもある⁽²⁾。

法然が源信を用いる際はほとんどが法然と同じ立場としており、法然と異なる立場だとする用例は少ないのである。法然が文治六（一一九〇）年（法然五八歳）の頃に東大寺において『浄土三部経』の講説を行った際の講義録の一つとされる『無量寿経釈』には、源信と善導（六一三—六八一）・法然との違いを示す数少ない用例があり、坪井

俊映氏や齋藤蒙光氏によって指摘されている^③。

一方、法然の複数の『往生要集』釈書には内容の矛盾が指摘されている箇所があり、その箇所は釈書の成立順序を判断する一因となっている。ただし、その議論では『無量寿経釈』における用例が考慮されているわけではない。本稿では『無量寿経釈』の説示を起点として、法然の『往生要集』釈書の成立において課題となっている内容の矛盾という点に検討を加えたい。さらに、法然において複数の『往生要集』解釈が並存していた可能性と、そのような『往生要集』釈書の成立時期について考察を加えたい。

一、法然の『往生要集』釈書の成立における課題

法然の『往生要集』釈書は、『往生要集釈』（以下、『釈』と略）、『往生要集詮要』（以下、『詮要』と略）、『往生要集料簡』『往生要集略料簡』の四つが現存しており、それらの成立順序について様々な研究がなされている^④。その中で林田康順氏は『釈』↓『詮要』の成立順序を提唱し^⑤、『釈』及び『詮要』における「物結要行B釈」について、後世の加筆による可能性を指摘する^⑥。「物結要行」というのは『往生要集』大文第五助念方法の第七「物結要行」において、次のように「往生の要」についてのまとめを説くものである^⑦。

問。上ノ諸門ノ中ニ所レ陳既多ケレトモ、未レ知三何シノ業カ爲二往生ノ要ト。答。大菩提心ト、護二三業ヲ、深ク信シ、至シテ誠、常ニ念セハ、佛、隨レ願、決定シテ生二極樂ニ。

すなわち、これまで説かれた往生行の中で「往生の要」は何かという問に対して、①大菩提心と②三業を護ることと③深く信じ④誠を至して⑤常に⑥仏を念ずるならば⑦願に随って、決定して極樂に往生するという七法を答え

るのである。この「惣結要行」について法然は二通りの解釈を残している。その一つは、『釈』における次のような「惣結要行」を『往生要集』の正意と捉えるものである。

先ッ發^ニ縁事ノ大菩提心^ヲ、次^ニ持^テ二十重ノ木叉^一、以^ニ深信^ト至誠^トヲ、常^ニ稱^シ彌陀ノ名號^ヲ、隨^レ願^ニ、決定^シ得^{ヘシ}往生^ヲ。是^レ則^ニ、此^ノ集ノ正意^{ナリ}也^⑨。

また一方で、「惣結要行」を『往生要集』の正意ではないとする解釈も残されている。同じ『釈』における次のような説示である。

云^フ大菩提心、護^ニ三業、深信、至誠、常、念佛、隨願、決定往生極樂^ト。此^レ尚^ラ准^シテ問^ニ雖^レ尋^ト要否^一ヲ、是^レ且^ッ助念門ノ意^{ナリ}也。非^ニ此^ノ集ノ正意^{ニハ}也^⑩。

『釈』では後者の立場として「要^トハ者、約^ニ念佛ノ一行^ニ勸進^{スル}文、是^{ナリ}也^⑪」と述べ、大文第四正修念仏の第四「觀察門」や大文第八念仏証拠の文言によって、念仏を勧める説示を『往生要集』の正意とする。特に法然は大文第八念仏証拠において諸行と相対して念仏を勧める点に注目している。

林田氏は二つの「惣結要行」解釈の中、前者の解釈を「惣結要行B釈」と呼び、後者の解釈を「惣結要行A釈」と呼ぶ。『釈』や『詮要』における「惣結要行B釈」について林田氏は、後世の加筆である可能性が高いとし、その根拠として、形式面及び前後の説示と解釈が矛盾するという内容面を挙げている。^⑫ 松岡法之氏は林田氏の立場をさらに進めて、法然の『往生要集』観という見方においては、「惣結要行B釈」↓『要集釈』（A釈のみ）↓『詮要』（惣結要行釈なし）という順序が推測される。これは正に助念仏から但念仏へと関心の重きが移っていく過程、『往生要集』の念仏から善導の念仏へと傾倒していく過程を示唆しているといえるのではないだろうか。^⑬ と論じている。また松岡氏は四釈書の成立年代に關して

『往生要集』諸釈書から三部経講説、『選択集』へという流れの中に、阿弥陀仏の本願（聖意）に裏付けられた称名念仏による往生を、思想、信仰の深まりと共に確信していく過程として見る事ができるだろう。それは則ち『往生要集』諸釈書を、『選択集』以後は固より、三部経講説以後の法然が著したとするには首肯し得ない所以である¹⁴

と述べる。さらに「惣結要行B釈」から「惣結要行A釈」への過程について

特にA釈とB釈においてみられるような矛盾する記述は、法然の中でそのことに対する考え方が変わったという¹⁵ことを示すものであり、そこにはそうした思想の変化に要する時間的な経過を内包しているはずであると考察し、「惣結要行B釈」→「惣結要行A釈」への変化に時間的隔たりを含めている。

次の章において詳説するが『無量寿経釈』では「惣結要行B釈」に当たる説示が述べられている。このことから、三部経講説より前に「惣結要行B釈」→『要集釈』（A釈のみ）→『註要』（惣結要行釈なし）という順序で、しかもそこに時間的な経過を含んで『往生要集』釈書が成立したとする松岡氏の説は、十分な論証がなされているとは言えない¹⁶。しかし松岡氏が述べる「時間的な経過」という観点は注目に値する。松岡氏は検討していないが、「惣結要行A釈」と「惣結要行B釈」が同時期に存在した可能性は果たして無いのだろうか。法然の『往生要集』釈書では様々な解釈が述べられているが、釈書の成立を論じるに当たっては、そのような異なる解釈の間に時間的な隔たりがあるのか否かの検討も必要であろう。この観点でもって『無量寿経釈』の説示を見ていく。底本については寛永九年版のものをを用いるが、そもそも『無量寿経釈』をはじめ『観無量寿経釈』・『阿弥陀経釈』を合わせた現存の『三部経釈』には新層と古層があり、法然の主著である『選択本願念仏集』がそのままの形で挿入されていることが岸一英氏によって指摘されている¹⁷。『阿弥陀経釈』については復元された古層が提示されているが、¹⁸『無量寿経

『無量寿経釈』においては岸氏によって如何なる箇所が新層であるかについては指摘されているものの、古層の全容は示されていない。よって、岸氏の論稿に基づいて筆者が古層だと判断した箇所を用いる。¹⁹⁾

二、『無量寿経釈』における『往生要集』の立場

『無量寿経釈』では前章で述べたように、四釈書における「惣結要行B釈」に当たる説示が述べられている。それは『無量寿経』巻下の三輩の文について、念仏往生に①但念仏往生、②助念仏往生、③但諸行往生の三つがあるとし、その②助念仏往生は①同類の善根と②異類の善根によって念仏を助成すると分類した中の②異類の善根についての説示である。

二 異類ノ善ト者、是レ往生要集ノ意也。彼ノ集ノ中ニ立テ十門ヲ、釋ス念佛往生一ヲ。且ク其ノ中ノ第四ハ正修念佛、第五ハ助念方法ナリ。〈云云〉正修念佛ト者、此ニ有五念門一。其ノ中ノ第四觀察門ハ、正レ是レ念佛門也。〈云云〉助念方法ニ有レ七。其ノ七ト者。〈云云〉且ク第七ノ惣結要行ニ、問テ云ク、「上諸門中」等。〈云云〉此ノ義ハ即、似ニタリ今ノ經ノ意一。此ハ即、以テ異類ノ善根ヲ、助レ成ス念佛一也。彼ノ集ノ意、以レ助ニ念佛一、爲ニ決定往生ノ業一。〈云云〉²¹⁾ここでは「惣結要行」を挙げ、『往生要集』の意は助念仏を決定往生業とすることだと述べる。これは正しく四釈書で述べるところの「惣結要行B釈」と同じ立場であると言える。²²⁾

一方で、福原氏が示した通り多くの説示においてそうであるように、『無量寿経釈』では善導と同じ立場として『往生要集』を用いている。次の箇所は、善導の義を中国や日本の諸師に依って補助するという説示である。

五 日本ノ源信ニ有ニ一ノ意一。一ニハ三重ノ問答、二ニハ專修等。〈立テ十門一、專明ニ念佛往生一、捨テ諸行一。云云〉

其ノ中ニ至^ニ第八門^ニ、相^ニ對^{シテ}念佛^ト諸行^{一ヲ}、有^ニ三番ノ問答^一。後日^ニ可^レ釋^レ之^ヲ。是^レ則^チ、捨^{ニテ}諸行^{一ヲ}取^ニ念佛^{一ヲ}、取捨ノ意^一也。次^ニ至^ニ第十門^ニ、亦^タ有^ニ二十門ノ料簡^一。謂^ク極樂ノ依正、乃至第十ノ助道ノ人法也。其ノ中ニ、第二ノ往生ノ階位ノ中ニ、有^ニ二ノ問答^一。以^{ニテ}善導ノ專雜二修ノ義^ヲ、問答^シ決擇^ス。其ノ問答、別^ニ書^レス之^ヲ、可^レ見^ル。故^ニ知^ス。惠心ノ意、始^{ニハ}於^ニ二行^ニ論^ニ取捨^{一ヲ}、次^{ニハ}用^ニ二善導ノ得失ノ義^ヲ。(二云云)⁽²³⁾

ここでは、『往生要集』大文第八念仏証拠の問答や大文第十問答料簡の第二「往生階位」において善導『往生礼讃』を引用する箇所を取り上げる。ここで解説される念仏は、「諸行を捨てて念仏を取る」と述べられるように、諸行による助けを必要としない念仏であり、但念仏を指していると言える⁽²⁴⁾。そもそも『無量寿経釈』で述べられる善導の念仏というのは但念仏であり、諸行による助けを必要としない念仏であるから、その善導を「補助する」という源信の念仏もまた諸行による助けを必要としない念仏を指していることは明らかである⁽²⁵⁾。

このように、『無量寿経釈』において法然は、『往生要集』の念仏について、但念仏だという解釈と助念仏だという解釈の両方を説いていると言える。またこれは、『往生要集』の念仏と善導の念仏が同じか異なるかという両方の立場を説いているとも言え、いずれにしても相反する二つの解釈が『無量寿経釈』には並存しているのである。

三、異なる『往生要集』解釈の並存の可能性

前章で見てきたように、『無量寿経釈』には異なる立場の『往生要集』解釈が並存している⁽²⁶⁾。異なる立場が同じ書物に並存する用例は、福原氏の論で挙げられているように「十七條御法語」にも見られる。そこでは『往生要集』の念仏に関して「善導與^ニ惠心^一相違義事⁽²⁸⁾」とも「善導ト一同也⁽²⁹⁾」とも在り、善導に対して二種の立場が示されて

いる。⁽³⁰⁾ そもそも法然の説法において、一念・多念や信・行など、両立しがたい説示は散見される。⁽³¹⁾ 法然において異なる立場が並存していること自体はあり得ないことではないと言える。

また『往生要集』の念仏について異なる解釈が同時期に並存しているということは、法然の『往生要集』理解の全体像が複数の立場による解釈から成り立っていることを意味する。それは、異なる釈書間における解釈においても例外では無いであろう。但念仏・助念仏という互いに対立する解釈でさえ並存しているのであるから、そのような相対関係にない解釈は、なおさらだと考えられる。すなわち、『釈』や『詮要』にはそれぞれ特徴的な解釈（例えば『釈』における「広・略・要」解釈や『詮要』における観想念仏と称名念仏を相対して称名念仏を選ぶ解釈⁽³³⁾）があり、そうした別々の釈書における異なる『往生要集』解釈が同一の時期に説かれていた可能性もあると考えられる。この観点に関連して坪井俊映氏は『往生要集』釈書の関係性を次のように述べる。

『往生要集詮要』一巻には別行本はなく、その内容主意は『往生要集釈』一巻と同じであるが、しかし、論述の焦点が異なっている。『詮要』では「正修念仏門」に説く称念（三想）説が中心であり、『要集釈』は「助念方法門」に説く「総決要行釈」に中心点があつて、解説する部分を異にしている。しかし、あかさんとする意図は同一である。⁽³⁵⁾

坪井氏は『釈』と『詮要』にそれぞれ異なった立場を見出しており、両書が異なる観点から『往生要集』を解釈するものだという視点を提示している。

そもそも『往生要集』では持戒や菩提心も勧められており、特に菩提心については大文第四正修念仏の第三「作願門」で詳細に説かれている。⁽³⁶⁾ さらにその全体の構成を見れば、大文第五助念方法の第七「惣結要行」を中心とした助念仏を説く書であり、⁽³⁷⁾ また念仏についても観想念仏を中心に説き、それに堪えられない者に称名念仏を勧める

という形式である。⁽³⁸⁾ そのことは大文第五助念方法の冒頭に「一目之羅^ハ不^レ能^レ得^レ鳥^ヲ。萬術^ヲ以^テ助^ニ觀念^ヲ一、成^{二七ヨ}往生^ノ大事^一⁽³⁹⁾」と述べられることからわかる。このように説かれていた『往生要集』の念仏に対して、『往生要集』は善導や法然の説く専修念仏（或は但念仏）と同じく称名念仏を勧めるのだ」と主張するのは容易ではないだろう。その主張を成立させる手段として、複数の釈書に亘る複数の観点からの解釈が必要であつたとも考えられる。⁽⁴⁰⁾ 『釈』における「広・略・要」解釈は、『往生要集』が勧めるのは諸行を伴う助念仏ではなくただ念仏だけであることを示し、⁽⁴¹⁾ 『詮要』における解釈では、観想念仏ではなく称名念仏が本意であることを説く。このように様々な観点から解釈することで、『往生要集』の念仏と善導・法然の念仏が同じであることを確固として主張できたのではないかと考えられる。

法然の『往生要集』理解が複数の立場から成立していることを考慮すれば、『釈』と『詮要』の説示は、思想の変遷によって新しい解釈が古い解釈に取って替わつたという見方だけでなく、いずれの解釈も存続して法然の『往生要集』解釈を形成したと考えることも必要ではなからうか。すなわち、一つの釈書のみが最終的な法然の『往生要集』解釈だと捉えるのではなく、法然の『往生要集』解釈は複数の釈書から成り立っている可能性も考慮すべきである。それは法然の『往生要集』解釈を受容するにあたって重要な視点だと考える。

四、『無量寿経釈』と『往生要集』釈書の成立との関連性

また坪井氏は『往生要集』の講述について次のように述べる。

法然の名声がひろく世の人々に知られるようになり、また帰依者、門人ができたのは大体、上人五十八歳頃、

即ち東大寺における『浄土三部経』講説の頃からと考えられる。それで、もし、諸伝記の伝えるごとき『往生要集』の講述があったとするならば、『三部経講説』即ち五十八歳以後のことと考える⁽⁴³⁾。

坪井氏は、この『往生要集』の講述が『釈』であるとし、他の釈書については次のように推察している。

法然の『往生要集』に関する一群の釈書の成立について推論が許されるならば、法然が後白河法皇の仙洞において、『往生要集』を講述されたときの講録（往生要集釈）を、後になって門人が、その要点と思われる部分をそれぞれ筆写して別本としたものが『往生要集大綱』、同『略料簡』、同『料簡』となったと考えるのである。

そして、仙洞における講説ののちに、再び門人達に講説されたものが『詮要』でないかと考えるのである。⁽⁴⁴⁾

ここで注目したいのは、『釈』や『詮要』といった釈書は、『三部経釈』以後に説かれたということである。⁽⁴⁵⁾『釈』や『詮要』の成立について、もし坪井氏の説に依るならば、『無量寿経釈』における『往生要集』の説示が『往生要集』釈書において相反する二つの解釈が説かれる要因を説明し得ることから、『往生要集』釈書において「惣結要行A釈」と「惣結要行B釈」は当初から並存していたと考えることもできる。⁽⁴⁶⁾すなわち、法然は『無量寿経釈』の講説において『往生要集』に対して二つの立場を説いており、その『往生要集』について講説を行うならば、当然、『無量寿経釈』で言及した二つの立場についての解説を求められ得るからである。⁽⁴⁷⁾特段の説明もなく「惣結要行A釈」と「惣結要行B釈」という二つの異なる立場が述べられる『往生要集』釈書は一見すると矛盾を孕んだものであり、林田氏には「一書の中にも関わらず、「要集」への解釈の矛盾が露呈してしまう⁽⁴⁸⁾」と受け止められている。しかし、これは『無量寿経釈』における二つの立場の説示を踏まえて『往生要集』を解説したものだからだと理解すれば、これらの解釈を受け入れることができるのではなからうか。⁽⁴⁹⁾

まとめ

本検討によって次のことを示した。

法然の『無量寿経釈』では『往生要集』についての二つの異なる立場が説かれている。法然の全体的な『往生要集』解釈は複数の立場による解釈から成り立っていると言える。

このことから『往生要集』釈書における様々な立場の解釈は、単に思想の変遷によって新たに置き換わったという見方だけでなく、それぞれの解釈が並存していたという可能性も考慮すべきだと考えられる。

また『往生要集』について複数の立場が説かれる『無量寿経釈』の講説を踏まえて講述されたのが『往生要集』釈書であると理解すれば、現存の四釈書において指摘されている内容の矛盾の解消につながるものと考ええる。

註

- (1) 「二期物語」(『昭法全』四三七頁十一行)。
- (2) 福原隆善「法然における源信教学の受容と展開」(佛教大学総合研究所編『佛教大学総合研究所紀要別冊 法然浄土教の総合的研究』佛教大学総合研究所、二〇〇二年) 一八〇頁。
- (3) 先学の指摘は、後述の用例を挙げる際に記す。
- (4) これらは古本『漢語燈録』所収のものを指す。他に新本『漢語燈録』に所収の『往生要集大綱』といった釈書もあるが、こちらは義山(一六四八―一七一七)による大幅な手が増えられていると考え、本稿では基本的に扱わない。

(5) 南宏信氏は先行研究を整理し、諸説をまとめた表を提示している（南宏信「法然『往生要集』諸釈書の六義について」『佛教大学大学院紀要』第三四号、佛教大学大学院、二〇〇六年）十四頁。

(6) 林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究」(『印度学仏教学研究』第四四卷第一号、日本印度学仏教学会、一九九五年) 一二五頁。

(7) この論に先立って平雅行氏が『日本中世の社会と仏教』（塙書房、一九九二年）二〇八頁の註において、論証はさ
れていないが、加筆増補であると指摘している。

(8) 『浄全』十五・一〇八頁上一行。ただし「要」⁷⁾となっている送り仮名を諸本に依って「要」とした。

(9) 『昭法全』二三頁十三行。ただし、善照寺本を底本とした。この他に『詮要』（『昭法全』九頁十七行）、『往生要集料簡』（『昭法全』十二頁七行）にも述べられる。

(10) 『昭法全』二二頁七行。この他に『往生要集料簡』（『昭法全』十二頁十一行）、『往生要集略料簡』（『昭法全』十五頁十行）にも述べられる。

(11) 『昭法全』二四頁四行。ただし「約」となっている訓点を諸本に依って「約」とした。

(12) 林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究―助念方法門、惣結要行釈をめぐって―」（『法然上人研究』第五号、法然上人研究会、一九九六年）六、七頁。

(13) 松岡法之「法然上人『往生要集』諸釈書の成立と展開」（『浄土学』第五一輯、浄土学研究会、二〇一四年）三〇一頁。

(14) 松岡法之「法然上人『往生要集』諸釈書の成立と展開」（『浄土学』第五一輯、浄土学研究会、二〇一四年）三〇二頁。

(15) 松岡法之「法然上人『往生要集』諸釈書の成立と展開」（『浄土学』第五一輯、浄土学研究会、二〇一四年）二九八頁。

(16) これについて既に齋藤蒙光氏が『無量寿経釈』に「物結要行B釈」に相当する内容が説かれることを指摘している（齋

藤蒙光「法然上人の『往生要集』観について―「往生要集詮要」を中心に―」（『佛教論叢』第五八号、浄土宗、二〇一四年）一六六頁、齋藤蒙光「法然上人の『往生要集』観―『選択集』第三・四章を中心に―」（藤本浄彦先生古稀記念論文集刊行会編『法然仏教の諸相』法蔵館、二〇一四年）四九六頁。

- (17) 岸一英『逆修説法』と『三部経釈』（藤堂恭俊博士古稀記念会編『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究 研究篇』同朋舎、一九八八年）一二八頁。

- (18) 岸一英『阿弥陀経釈』古層復元本」（『佛教文化研究』第五四号、浄土宗教学院、二〇一〇）。

- (19) ただし、古層の範囲はまだ十分に明らかとなっていないため、古層解明について岸氏の論稿以上の進展が見られた場合、本稿で挙げる箇所についても再考する必要がある。

- (20) 「但諸行往生」について、寛永九年版・承応三年版にはその科文は説かれておらず「但念仏往生」と「助念仏往生」の二意となっているが、正徳五年版（『昭法全』八八頁十二行）や聖聰（一三六六―一四四〇）の『大経直談要註記』卷一に所収の『無量寿経釈』（『浄全』十三・十九頁上三行）には三意が説かれている。岸氏が「寛永・承応版では但諸行を脱して二意となっているが、これは古活字版等の三意が文脈よりしても正しい」（岸一英『無量寿経釈』古層の復元―『三部経釈』の研究（二）―」（佐藤成順博士古稀記念論文集刊行会編『佐藤成順博士古稀記念論文集 東洋の歴史と文化』山喜房佛書林、二〇〇四年）五二〇頁）と述べており、これ以後における「亦た、諸行往生の義有り」（『昭法全』九〇頁十四行。原漢文、「此の三義に付きて傍正を論ず。但念佛を以て正と爲、餘の二を傍と爲」（『昭法全』九〇頁十六行。原漢文、「上の助念及び諸行を廢して、但念佛を明す」（『昭法全』九二頁八行。原漢文、「諸行を廢して但念佛に歸するなり。助行、猶を之を廢す。況や但諸行をや」（『昭法全』九二頁十七行。原漢文）等の文言から判断すると、もともと「但諸行往生」の項目があったと考えるべきである。

(21) 『昭法全』八九頁十三行。(試訳…二に異類の善根というのは、これは『往生要集』の意である。『往生要集』の中には十門〔の古文〕を立てて、念仏往生を解釈する。とりあえずその中の第四は正修念仏であり第五は助念方法である。〔云云〕〔大文第四の〕正修念仏には五念門がある。その中の第四の觀察門は正しく念仏門である。〔云云〕〔大文第五の〕助念方法には七つ項目がある。その七つとは。〔云云〕とりあえずその第七の惣結要行に、「上の諸門の中で」などと問うて言うことに。〔云云〕この意味は今の『無量寿経』の意図に似ている。これはつまり異類の善根によって念仏を助成するのである。『往生要集』の意は、念仏を助成することを決定往生の業とする。〔云云〕ただし、この箇所については、前掲の福原氏の論には挙げられていない。岸一英氏によると「但念・助念・但諸行の三往生義の説が『三部経釈』古層の説であって、その後に続くいわゆる廢立・助正・傍正は古層には認められない」(岸一英『無量寿経釈』古層の復元―『三部経釈』の研究(二)―)(佐藤成順博士古稀記念論文集刊行会編『佐藤成順博士古稀記念論文集 東洋の歴史と文化』山喜房佛書林、二〇〇四年)五二頁)とのことであり、本箇所はこの中の「助念」の説示であることから古層に属すると考える。また角野玄樹氏も、その論稿において新層・古層を考慮した上で当該箇所を古層として用いている(角野玄樹「法然教学における但念仏と専修念仏との相違」〔佛教大学法然仏教学研究センター紀要〕第二号、佛教大学法然仏教学研究センター、二〇一六年)七頁)。

(22) この用例について、坪井俊映氏は「この助念仏往生の考えは善導において見ることが出来ない教説」と述べ、源信と善導の差異を指摘する(坪井俊映「法然における『往生要集』の受容と展開―特に『浄土三部経釈』、『選択集』を中心として―」(往生要集研究会編『往生要集研究』永田文昌堂、一九八七年)三〇五頁)。また、齋藤蒙光氏は「総結要行」B釈と同様に、助念仏往生こそが、『往生要集』の本意だと受け止めている」と述べている(齋藤蒙光「法然上人の『往生要集』観―『選択集』第三・四章を中心に―」(藤本浄彦先生古稀記念論文集刊行会編『法然仏教の

諸相』法藏館、二〇一四年）四九六頁）。また別の論稿では「少なくとも三部経講説の時点で、法然は助念佛が『要集』の正意だとする考えを捨てていないようであり」と述べ、「物結要行B釈」と同じだと捉えている（齋藤蒙光「法然上人の『往生要集』観について―『往生要集詮要』を中心に―」（『佛教論叢』第五八号、浄土宗、二〇一四年）一六六頁）。

(23) 『昭法全』八六頁十四行。（試訳…五に日本の源信には二つの意がある。一つには三重の問答、二つには専修等である。〈十門を立てて専ら念仏往生を説き、諸行を捨てる。云云〉その（『往生要集』の）中の〔大文〕第八〔念仏証拠〕門では、念仏と諸行とを相對して、三つの問答がある。後日にこれを解釈する。これはつまり諸行を捨てて念仏を取る、取捨の意図である。次に〔大文〕第十〔問答料簡〕門にはまた十の問答がある。すなわち、〔第一の〕〔極樂の依正〕から第十の〔助道の人法〕までである。その中の第二の〔往生の階位〕の中に二つの問答がある。善導の専修・雑修の二修の義によって、問答し、決定して解釈している。その問答は別に記すので見るがよい。故にわかるだろう。源信の意は、初めには（念仏と諸行の）二行において取捨を論じ、次には善導の得失の義を用いている。（云云）

(24) この用例について、坪井俊映氏は「源信の『往生要集』は善導の教えを指南として書かれたものであって、諸行を捨てて念仏の専修を説くものとするのである」と述べる（坪井俊映「法然上人の南都における『浄土三部経』講説の立場について―天台黒谷沙門源空として―」（戸松啓真教授古稀記念論集刊行会編『戸松教授古稀記念 浄土教論集』大東出版社、一九八七年）四〇三頁）。また別の論稿において「法然によると源信の『往生要集』は善導の教えを指南として述作されたものと見て、『往生要集』が説く念仏をすべて称名と解し、善導が念仏の専修を説いて雑行雑修を捨てると同じように『往生要集』も「捨」雑取「専」意ありと説くのである」と述べる（坪井俊映「法然における『往生要集』の受容と展開―特に『浄土三部経釈』、『選択集』を中心として―」（往生要集研究会編『往生要集研究』永

田文昌堂、一九八七年）三〇二頁）。また『詮要』には『往生要集』大文第十問答料簡の第二「往生階位」を引用して専雑二修を解釈するという、この用例に類似した説示があり、林田氏は『詮要』における当該箇所について、「B 釈中の文言には、（中略）専修重視の姿勢とは程遠い」として法然が「往生階位」から専雑二修を解釈する内容と「惣結要行B 釈」とは「解釈の矛盾が露呈してしまう」と述べる（林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究―助念方法門、惣結要行釈をめぐって―」（『法然上人研究』第五号、法然上人研究会、一九九六年）七頁）。

（25）法然は善導の念仏についても、助念仏往生や但諸行往生を認めている。助念仏往生については、前の用例の異類の善根の対となる項目である、助念仏往生の中の同類の善根の説示である。そこでは、善導の五種正行を指して「前に善導の専修正行の中の助念、是れなり。前に委しく申し了んぬ」（『昭法全』八九頁十三行。原漢文）と説いている。また但諸行往生については、但諸行往生について述べた後「加之、善導『観経の疏』に「復有三種衆生」の文を釈す。粗ぼ此の義を見たり（云云）」（『昭法全』九〇頁五行。原漢文）と述べる。しかし、これらについてはその後の説示において「但念仏を以て正意と為」（『昭法全』九〇頁十六行。原漢文）と述べており、善導の正意はあくまで但念仏である。ただし、岸一英氏による『無量寿経釈』の新層・古層の説（岸一英「『無量寿経釈』古層の復元―『三部経釈』の研究（二）―」（佐藤成順博士古稀記念論文集刊行会編『佐藤成順博士古稀記念論文集 東洋の歴史と文化』山喜房佛書林、二〇〇四年）五二〇頁）に依るならば、この文言が指している「前」の善導の五種正行を述べる箇所自体が新層となり、「善導の専修正行の中の助念」や同類の善根の説示そのものに対して疑義が生じる。この箇所については、『選択本願念仏集』との一致箇所を削除しつつも岸氏が「善導からの引用文のみが示されていたのではないかと推定される」（岸一英「『無量寿経釈』古層の復元―『三部経釈』の研究（二）―」（佐藤成順博士古稀記念論文集刊行会編『佐藤成順博士古稀記念論文集 東洋の歴史と文化』山喜房佛書林、二〇〇四年）五二〇頁）と述べるように古層を単純

に断定することができない。「善導の義を中国や日本の諸師に依つて補助する」項目における珍海（二〇九二—一一五二）における説示においても「善導の前の文に依りて、傍に諸行を述ぶと雖も、正しくは念佛往生を用ゐる」（『昭法全』八七頁四行。原漢文）と述べられており、善導の引用文があったことが推測されるからである。

- (26) 異なる『往生要集』観が並存していることについて、南宏信氏は『釈』について「このような二つの立場は『要集釈』（『要集鈔』）自身の中にも確認できる」と法然の『往生要集』観に複数の立場があることを指摘する。ただし、南氏の論では、『釈』は「複数の断片から成立しており、それがあある時期にまとめられてひとつの『要集釈』（『要集鈔』）なるものが編纂されたのであらう」とし、二つの立場が同一時期に並存したか否かについては触れていない（南宏信『往生要集釈』の構成について」（『佛教大学大学院紀要』第三五号、佛教大学大学院、二〇〇七年）一三三頁）。また齋藤蒙光氏は、「三部経講説の当時、法然の『要集』観には幅があったということになる」と述べ（齋藤蒙光「法然上人の『往生要集』観について——『往生要集』四釈書と三部経講説をめぐって——」（『浄土宗学研究』第四〇号、知恩院浄土宗学研究、二〇一四年）七二頁）、また「その当時の法然の『要集』観には幅があったのかもしれない、四釈書の内容の相違がそのまま成立の順序を意味するかどうかについては、より厳密に検証しなければならない」と指摘する（齋藤蒙光「法然上人の『往生要集』観について——『往生要集』詮要を中心に——」（『佛教論叢』第五八号、浄土宗、二〇一四年）一六七頁）。ただし、いずれも本検討で扱う箇所を論じたものではない。また法然が複数の考え方を内包していたことについて、前註で触れたように、法然は『無量寿経釈』において、『往生要集』についてだけでなく、善導の念仏往生の立場においても複数の考え方を認めていることも注目しなければならない。

- (27) 福原隆善「法然における源信教学の受容と展開」（佛教大学総合研究所編『佛教大学総合研究所紀要別冊 法然浄土教の総合的研究』佛教大学総合研究所、二〇〇二年）一六七頁。

(28) 『昭法全』 四七一頁十七行。

(29) 『昭法全』 四七二頁四行。

(30) 十七條御法語における二面性については、南宏信氏〔南宏信「『往生要集釈』の構成について」(『佛教大学大学院紀要』第三五号、佛教大学大学院、二〇〇七年) 二二頁〕や齋藤蒙光氏(齋藤蒙光「法然上人の『往生要集』観―『選択集』第三・四章を中心に―」(藤本淨彦先生古稀記念論文集刊行会編『法然仏教の諸相』法蔵館、二〇一四年) 四八八頁)が触れている。ただし、松岡氏の指摘のように異なる解釈における時間的経過を考慮するならば、異なる条目の法語を同一の時期のものとして扱うには更なる検討が必要になる。

(31) 法然の説法の特徴について福原隆善氏は「法然は臨終の際に善知識に遇うとか、正念に住するとか、来迎の問題など、誠に柔軟な立場を示している。このことはいずれか一方に決定すると、そうならなければ往生は不定になるという不安が先行することになるので、いずれであっても念仏一つで仏の願力に乗じて成就するという心の問題を重視する立場を示している。これについては善人悪人、一念多念、信行、平生臨終などいずれにおいても同様で片方を強調することを避け、ただ念仏こそ救済される唯一の方法としている」と述べ(福原隆善「法然における生死の問題」(福原隆善編『八百年遠忌記念法然上人研究論文集』知恩院浄土宗学研究所、二〇一一年) 二七頁)、一見すると矛盾するような対立概念が説かれることについて、その両方を説く意図を考察している。またそのような例の一つについて齋藤蒙光氏が検討している(齋藤蒙光「法然の和語文献における矛盾的表现について」(『東海仏教』第六一号、東海印度学仏教学会、二〇一六年))。

(32) 『昭法全』 十九頁八行。

(33) 『昭法全』 五頁十七行。

- (34) 先学において四釈書の成立順序の研究が多くなされているが、順序を論証するに当たっては、同じ内容に対する説示の差異に注目して成立順序が検討されてきた。しかし、『釈』や『詮要』にあるそれぞれ特異な解釈について、それらの順序が検討されてきたわけではなく、そのような解釈が同時期に説かれていた可能性は十分あり得るであろう。なお、服部正穩氏が『釈』と『詮要』の成立順序を考察する中で、『詮要』には「惣結要行」は『往生要集』の正意ではない」と述べる文言がないことについて「非正意説が詮要にはなく釈以下のものにはある。この非正意説は法然の要集観の中心思想が七種助念から専修念仏へと移行して行く過程を示すものである。これも重要な思想であるにもかかわらず詮要には見えない」（服部正穩『法然の『要集』末疏成立に関して』（『東海学園女子短期大学紀要』第十八号、東海学園女子短期大学、一九八三年）九三頁）として『詮要』↓『釈』の成立順序を想定している。しかしこれは異なる解釈間の順序を考察したものではない。なお、「惣結要行」は『往生要集』の正意ではない」と述べる文言自体はないものの、『詮要』における「合」解釈は、その内容から、「惣結要行」を『往生要集』の正意としない解釈である。
- (35) 坪井俊映『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』（隆文館、一九八二年）二〇四頁。
- (36) 「作願門」はさらに①「菩提心行相」、②「利益」、③「料簡」と項目を分けて解説されており、同じ五念門である「禮拜門」、「讃歎門」や「廻向門」にこのような項目分けはない。また分量においても、他の三門は『浄土宗全書』の頁数で一、二頁程であるのに対して、「作願門」は実に十頁も説かれている（念仏を説く「観察門」は八頁である。ただし、念仏に関する説示は『往生要集』全体に述べられるため、「観察門」が念仏に関する説示のすべてではない）。
- (37) 実際、「惣結要行」では、「往生の要」は何なのかという問答を設けて、それまでに説いた往生行のまとめを述べている。
- (38) 大文第四正修念仏の第四「観察門」では「別相観」、「惣相観」を説いた後の「雑略観」において「若有^レ不^レ堪^レ觀^ニ念^{スルニ}相好^一、或依^ニ歸命ノ想^ニ、或依^ニ引攝ノ想^ニ、或依^ニ往生ノ想^ニ、應^ニ一心^ニ稱念^ス」（『浄全』十五・八五頁下七行）

と述べられる。

- (39) 『浄全』 十五・八八頁上十一行。(試訳…一つの網目の網では鳥を捕らえることはできない。多くの方法によって観念を助け、往生という大事を成就しなさい。)

- (40) このように『往生要集』を複数の視点から解釈する姿勢は、良忠(一一九九—一二八七)の『往生要集義記』にもみられる。『往生要集』の序分「依念仏一門」についての解説において「總^テ而言^ハ之^ヲ不^レ要^トセ、觀稱^ヲ爲^レ要^ト。別^{シテ}而言^ハ之^ヲ觀^ヲ不^レ要^トセ、稱^ヲ爲^レ要^ト也」(『浄全』 十五・一六五頁下一行)と述べる箇所である。ここで良忠は『往生要集』について、諸行念仏相対と称名觀想相対という二つの見方を提示している。この箇所については別稿を予定している。

- (41) ただし筆者は「広・略・要」解釈だけでなくその前に説かれる「合」解釈をも関連させて諸行念仏相対を説くものであると考えている(拙稿「法然『往生要集釈』における合・広・略・要の関連性」(『佛教大学大学院紀要』第四八号、佛教大学大学院、二〇二〇年) 参照)。

- (42) 上述の解釈の他、『釈』や『詮要』では、『往生要集』大文第十問答料簡の第二「往生階位」で善導『往生礼讃』が引用される箇所についての解釈等が共通して説かれる。

- (43) 坪井俊映『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』(隆文館、一九八二年) 二〇二頁。

- (44) 坪井俊映『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』(隆文館、一九八二年) 二〇五頁。

- (45) ただし、坪井氏は『往生要集大綱』等の新本『漢語燈録』所収の釈書について、義山による校訂が批判されていることに対して、「義山が改訂した目的は上述のように、宗典の普及にあったと考えられるから難澁な文章を訂正し、意味を明確にするために補記加筆されたものと思う。さらに考えられることは、上人の述作とされるものはほとんど

門人の筆録である。したがって初めより数種の異本の存在していたことが考えられる。そのために、義山は体裁を異にし、また内容の不充分と思われるものを比較校訂し、内容を増広することによって祖意を明確にせんとしたものと思われる。したがって義山の校訂を無下に排することはできない」（坪井俊映『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』（隆文館、一九八二年）三二頁）と述べ、『往生要集』釈書については「『往生要集釈』と別行の三本（大綱、略料簡、料簡）との関係を考えるに、初めに上人が講述された『往生要集釈』なる書があつて、その部分が別行して、現存のごとき『大綱』、『略料簡』、『料簡』なる短篇のものが出来たと考えられるのである」（坪井俊映『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』（隆文館、一九八二年）一九〇頁）と新本『漢語燈録』所収の釈書を法然在世当時のものだとしていることには注意を払う必要がある。

- (46) ただし、形式面においてはやはり林田氏等が指摘するように課題がある。もし複数の考え方を表明するのであれば、「〇〇に二つある。一つには〇〇、二つには〇〇」といった形式や「〇〇。或は〇〇」といった言葉を伴って述べられるのが普通であると考えられる。

- (47) また或は『無量寿経釈』における説示を前提として東大寺講説の前後に、『往生要集』に関する解釈をまとめた手控書とも考えられる。いずれにしても『往生要集』釈書の成立の背景に『無量寿経釈』が想定され得る。

- (48) 林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究―助念方法門、惣結要行釈をめぐって―」（『法然上人研究』第五号、法然上人研究会、一九九六年）五頁。

- (49) 筆者は『釈』における「広」解釈と「惣結要行B釈」との関連性から、『釈』における「惣結要行B釈」が後世の加筆ではない可能性も検討すべきだと考えている（拙稿「法然『往生要集釈』における合・広・略・要の関連性」（『佛教大学大学院紀要』第四八号、佛教大学大学院、二〇二〇年）九頁）。